

(銀のエンジェル賞 中学生の部)

もうひとり。

中三・弓気多 咲花

『初めまして、もうひとりの私。』

平衡感覚が失われそうなほど真っ白い空間を背に、その子は一こりと目を細めてそう口にした。

ミンミンミン…と降ってくる何匹かのセミの合唱。べたりと貼りつく制服を摘まんで浮かし風を入れながら学校からの帰り道を重い足で歩いていた。自室に着けば、ぱたとベッドに半ばダイブするように倒れこみクローラーをつける。それから着替えて、宿題が出されたから机に向かって、夕飯に呼ばれて、シャワーを浴びて、就寝。

そんないつもと何ら変わらない私の日常。敢えて違うところを挙げるとするならば、普段は眠りが深くて滅多に夢を見ない私がウン年ぶりに夢を見たことくらいだろうか。夢だと理解している夢は明晰夢と言うんだったっけ。記憶を整理するとき夢を見る、みたいな話は聞いたことがあるけれど、それならこれは何の記憶なのだろう。そんなことをぼんやり考えながら周りの白を見回しているとふいに背後から視線を感じ、反射的にそちらを振り返る。

『ごめんね？びっくりさせちゃって。怪しい者じゃないから安心してほしいな。』

危険か、だとか。怖い、だとか。そんなことは不思議とちっとも感じなかった。

「…あなたは誰？ここは、夢？」

『うん、そうだよ？ここは夢の世界だし、私はあなたでああなたは私。名前は斎藤美結、歳は一週間後の八月十三日で一五才。両親は共働きの一人っ子、そうでしょ？』

目を見張る。けれどすぐに考え直した。だってここは夢なんだから、私が私のことを知っているなんて至極当然のことなんだもん。

『真正銘の夢。でも私はあなたの想像の中の存在では無いし、実体こそは無いけど実在はしてる。れっきとしたあなた自身だよ。』
最後にそう発せられた言葉を聞きながらけたたましい音に包まれる。

ぱちり、自室のベッドで目を覚ました。無意識に寝ている間に泣いてしまったのか、それともあくびでか、はたまたその両方か。頬には涙が一筋だけ伝っていた。ただ、不思議と無性に悲しいという気持ちだけが漠然と取り残されていた。枕元でうるさく鳴る目覚ましを止めてひとつ伸びをする。

「おはよう、美結。」

階段を降りてリビングに行けば、コーヒーの入ったマグを片手に新聞を読んでいたパパが顔をあげて声をかけてくる。それにおはよう、と返して食パンをくわえながら髪を結び学校へ行く支度をする。「いってきまーす。」とパパと声を揃えて家を後にする。塾の夏期講習に、仕事に。また普段と変わらない退屈な毎日が始まる…と思っていた。

『えー？美結、こんな問題もわからないの？』

突然頭の中に響く、自分自身の声。でも、心の中で考える時とは違って、本当に私の声をした誰かに話しかけられているような。そんな不思議な感覚に驚いて授業中にも関わらず席を立ち周りを見回してしまった。

「齋藤？どうかしたか。」

先生からの訝しげな視線を感じる。くすくすと笑う声が聞こえた。かあ、と顔に熱が集まるのを感じながら、何でもありませんと着席。それと同時にまたさっきの声が降ってくる。

『恥ずかしいって。私はあなたにしか見えないのに。言ってるじゃん、私はあなた自身なんだってば。』

何それ。夢の内容は何故か鮮明に覚えていたけれど、急に話しかけられて驚かない方がおかしい。もしかして知らない間に居眠りしちゃってたり？それとも……。

『まさか幻聴、とか思ったでしょ。違うよ。何て言ったらいいのかな、二重人格みたいなものだと思うよ。』

そう言われて納得なんて出来っこない。なんて考えていたから先生に指されたことにすぐ気付けなかった。

「齋藤？おい、聞いているのか。」

ひゃい！？なんて気の抜けた声を出す私をよそにけらけら笑うもうひとりの私（仮）。内心舌打ちをする私に、視界の端でやれやれと肩を竦めるのが見えた。仕方ないなあ、という声が聞こえた瞬間、ぷつりと意識が途切れた。

次に意識が戻ったとき――とは言え然程長い時間が経過した訳でもなく、たったの数分ほど。すつと意識が戻っていく感覚と共に視界が開けていく。

「なんだ齋藤、お前も出来るじゃないか。」

え？と思った。何故私は褒められているのだろうか。だって私は数学なんて大の苦手だし、当てられた問題はまだ解けてもいなかった。それなのに私の人指し指と親指は白く粉っぽくなっていて、目の前の黒板には私の字で書かれた答えに正解だと言わんばかりの

満開の花丸が咲いていた。

『言ったじゃん？私はあなたであなたは私、二重人格みたいなものだって。あなたと入れ替わって代わりに解いてあげたんだから感謝してよね。』

信じざるを得なかった。もちろんこの一件だけで信じ切った訳では無いけど、三日くらい経った頃にはなんで急に二重人格に？とは思いつつも自然に彼女を受け入れていた。

「ね、次数学のテストなんだけど代わってくれない？」

ええまたあ？と呆れたように言うもうひとりの私にお願い！と頼み込む。彼女は私とは真反対で数学と体育が得意だった。

『全くもう。いつまでも私が美結と一緒にいると思ったら大間違いなんだからね。』

「わかってるよ、今回だけ！」

『って前回に言ってたのはどこの誰だか…。』

そんな言葉には耳を貸さず早々に意識を捨てる。最近になって代わってもらっている間にも意識を薄くだが残せるようになり、私の身体が動いているのを少し上から見下ろしているというまるで幽体離脱をしているかのような光景を味わっている。そしてやがてふわと流れに身を任せていれればいずれ身体に戻る。それがなんだか心地良くて、二つの人格がぐるぐると混じって溶けていく。

事が起きたのはその翌日。朝普段通りに起きたのに、感じる何かの違和感。その正体はすぐにわかった。身体を動かしている人格が私ではなくもうひとりの私だったのだ。要するに、普通と立ち位置が逆転していたということ。なんだ、大した問題ではない。と暢気に構える私とは裏腹に何やら顔色の悪いもうひとりの私。ただならぬその雰囲気には恐る恐る声を掛けてしまう。

「ど、どうしたの？」

『どうしたもこうしたも、大変なことになっちゃったの！』

彼女の口から語られたのは、にわかには信じ難い内容だった。誰なのかはママに聞いてほしいが、と前置きされ伝えられたのは「もうひとりの私」は人格ではなく霊的なものだったということ。今までは人格が入れ替わっているのではなく短時間だけ魂を交換していたということ。いつも感じていた幽体離脱のような感覚は、みたく、ではなく本当に幽体離脱だったのだということ。そして今までは問題なく出来ていた魂の入れ替わりが何故か出来なくなっているということ。入れ替わったまま戻れなければ私の存在が消滅してしまうかもしれないこと。今日が終わるまでにどうにかすればその心配は無いということ。頭がまともに働かず、一匹のミンミンゼミの鳴き声がぐるぐると反響して聞こえて、それから消えていった。そこから先の記憶は無い。

『本当はね、守護霊みたいにならずと傍にいたの。でもいるだけ。話せはしないしポルターガイストみたいなことだってもちろん出来ない。それだけで楽しかったの。』

『でも大丈夫、どうにかして私が出ていくから。きっともう、傍には居られなくなってしまうけれど。』

そんな声だけが私の中に取り残されて、胸の温かいものはすっと引かれたように消えていった。

ぱちり、自室のベッドで目を覚めました。無意識に寝ている間に泣いてしまったのか、それともあくびでか、はたまたその両方か、頬には涙が一筋だけ伝っていた。ただ、唯一分かったのは「さっきまで見ていたものは夢なんかでは無い」ということだけ。ようやく正体の分かった悲しさと少しの喪失感を胸に抱えながら、後数分で鳴

る目覚ましを止めてひとつ伸びをしりビングへ向かう。

「おはよ、ママ。ねえー」

ことり、とコップをテーブルに置いてママが徐に話し始める。

「：あなたが小さい頃に一度話したただけだったのよね、産んだ直後に死んでしまった双子のお姉ちゃんのこと。」

自分に死んだ魂が乗り移ったなんて言っただころで信じてもらえない訳が無い。だから、不思議な夢を見たんだけど、という切り出し方で尋ねてみた。暫しの沈黙の後、何かの因果があつたのかもね、そうママが涙ぐみながら笑って言う。流れっぱなしのニュースが喋る。

「おはようございます、今日は八月十三日。お彼岸ですね！：：」

そう、十三日。私の誕生日であり、お姉ちゃんの誕生日であり、お彼岸でもある日。テレビを消してママがパチンと両手を合わせる。

「さ、素麺でも食べよっか。そしたらケーキでも買いに行こうよ。」

今日はあなた達二人の誕生日なんだから。」

窓辺に飾っていたナスとキュウリが楽しそうに揺れた気がした。

遠いどこかで、アブラゼミが元気に鳴いている。
